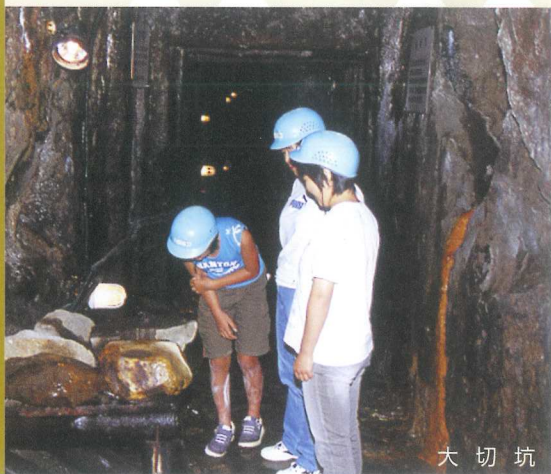


一二〇〇年の時を越え
現代によみがえった黄金伝説。



大切坑

黄金伝説

保元年中（一一五六～一一五九）より始めて官府に属す。承安年間（一一七一～一一七五）平族奥羽の按察使池大納言頼盛が奉行となり、平族亡びて源頼朝以下代々の武將、之を管理せり。慶長の始め、豊臣秀吉より刈羽郡稚谷の城主、堀三左衛門を以て奉行となる。略（温故の棗より）慶長三年（一五八九）の豊臣秀吉の「伏見城蔵納目録」には、諸国からの黄金の運上額三、三九七枚八兩余の三分の一にあたる一、一二四枚四兩という多額の金が越後黄金山から上納されたと記録され、当時は佐渡金山をはるかにしのぐ全国一の産金量を誇っていたと記されている。

日本一の鳴海金山は、上杉景勝の隠し金山とされ、わずかな古文書や絵図によってのみ知らされているだけです。一九六八年（昭和四三）、鳴海金山遺跡の大規模な調査が行われ二十七箇所坑口跡が確認され、一九八三年朝日スーパラインが開通し、一九九三年（平成五）から一般公開されております。金山にまつわる夜話「黄金の山を発見」、「天蓋の鬼婆バア」、「熊坂長範」、「千畳坑と赤川」、「金の扉」などがあります。

越後黄金山

えちご かがねやま
高根集落の奥深くにある鳴海金山の歴史は、佐渡金山よりも古く、大同二年（八〇七）の発見から江戸幕府まで採掘が続きました。

その昔、新潟県の北部山北町、朝日村一体に点在する金山遺跡の総称として、越後黄金山と呼ばれておりましたが、佐渡金山が発見されてから高根金山、相之俣金山、鳴海金山と呼ばれております。岩船郡内には、鳴海金山のほか猿田金山（朝日村）、沼金山（関川村）、大毎金山、大沢金山（山北町）があり、戦国期から江戸初期ごろには

日本屈指の金山地帯であり、いずれも山中の奥深い場所にあります。

鳴海金山は、高根金山、相之俣金山とも呼ばれ、高根金山の名は、旧高根村また、集落名の地にあることから起り、相之俣金山は、金山の発見者として語り継がれている、修験行者だった相之俣弥三郎の名前を取って呼ばれている。鳴海金山は、東北方向の猿田川、高根川の源流部に位置し標高七〇〇メートル〜八〇〇メートルの鳴海山、駒ヶ岳、焼峰の三山を中心に金山遺跡は展開しています。

鳴海金山の鉱床

鳴海金山の鉱床は、鳴海山地域に分布する新第三紀層の上部を占める砂岩頁岩層の中に胚胎している。金鉱床は、裂かや割れ目に沿って生じた粘土中に金（自然金）を含んでいる粘土脈鉱床です。

鉱床母岩

- ・凝灰角礫岩（流紋岩質）
- ・火山円礫岩
- ・黒色硬質頁岩
- ・凝灰質砂岩
- （ところにより炭化木片を多く含む）
- ・礫質砂岩
- ・泥質凝灰岩
- ・凝灰岩（流紋岩質）



鳴海山 ブナ林

樹齢200年以上のブナ原生林（新潟県自然環境保全地域）

多くの謎と
ロマンを秘めて。

黄金坑